

スーパー台風上陸の恐れ

名古屋大地球水循環研究センター(名古屋千種区)や気象庁気象研究所などのグループは六日、地球温暖化が進んだ場合、今世紀中にも超大型の「スーパー台風」が日本に上陸する可能性がある」と発表した。スーパーコンピューターによる解析結果で、グループは「スーパー台風を想定して防災対策を進める必要がある」と呼び掛けている。

「温暖化進めば今世紀にも」

スーパー台風は、二〇一三年にフィリピンに上陸して七千人以上の死者・行方不明者を出した台風30号など、地表付近の最大風速が六七メートルを超える台風を指す。南海上でスーパー台風が発生しても、従来ならば

北進して海水温の低い海域に入るにつれて勢力を落とし、日本に上陸する。グループは、温暖化によって海水温が現在より二度ほど上がった環境で発生する最も勢力の強い台風をスーパーコンピューターで推

名大など分析

定。中心付近の気圧が八六〇気圧、最大風速が八五〜九〇メートルの極めて強い台風が発生するとの結果が出た。その場合、北進しながら勢力を弱めたとしても、スーパー台風として日本に上陸する可能性があるという。

同センターの坪木和久教授(気象学)は「温暖化が進んだら、スーパー台風が強い勢力のまま日本に上陸することが予測される。研究結果は、今後の防災対策を進める上で有益な資料になる」としている。

研究結果は米科学誌「サイエンス」に掲載される。

反戦命ある限り

ジャーナリスト むのたけじさん100歳に



100歳の誕生日を祝うむのたけじさん=2日、さいたま市で

反戦を訴え続けてきたジャーナリスト、むのたけじさんが、二度のがん治療を乗り越え二日、百歳になった。足腰や目は弱くなったが鋭い舌鋒は健在だ。「今の日本は戦争のおいがかぶるんぶんする。生きていく限り、戦争をなくすことに役立ちたい」。戦後七十年を迎え、放つ言葉には一層の力がこもる。

「負け戦を勝ち戦と報じ続けてきたけじめをつける」。一九四五年八月の終戦を受け朝日新聞社を退社。故郷の秋田県横手市で「ミニコミ誌」だいまつ新

聞」を発刊し、三十年間、反戦記事を書き続けた。今、さいたま市で暮らし、講演や執筆をする。むのさんは、昨年の衆院選を振り返り「投票率52%

子どもたちよ 2015

私の戦争体験

38

終戦の時、私は七歳。今の三重県いなべ市にいました。子ども心に八月十五日で戦争は終わったと思っていました。実際、空襲警報や爆撃機の音はなくなりませんでした。でも、静かな日々は長くは続き

加治 敏男さん 86歳 名古屋市千種区

級生が竹やりで突いていたわら人形から想像していたのは大違いです。歩いてさえいなかった。

目的は、学校の西側にあった山の弾薬庫の処理でした。毎日、日中には弾薬を爆破する「ドーン」という音があたり響き渡っていました。

米軍は講堂を中心にキャンパスを張っていましたが、実は校舎の半分を日本軍に占拠さ

校内で顔いつも笑顔やチューインた。怖くはな

本格的な軍用ていなかっう思い始めてんなあまン、パーンこえました。校の方から

影を

なんいえは自れたに、いけ状況た。「倍晋足のス推要性取材者のまい要の映る安秘自衛影を

福

東